

身近に普通にみられるセセリチョウのなかではきらびやかできれいなチョウがキマダラセセリですが、イチモンジセセリやチャマダラセセリほど多くはなく、私も高砂では西畑の斎場内でホシミスジの観察中に一度みかけただけで、そのときにはカメラを向けたとたんに飛び去られて記録がとれませんでした。セセリチョウの仲間は人の気配にとっても敏感なのです。

今回、加古川市で絶滅危惧 I 類指定のヒメヒカゲの生息調査活動の際に、久しぶりにキマダラセセリに出会えました。あいかわらず人の気配には敏感ですが、食草となるススキなどが繁る環境であれば、強く驚かさない限り、一度飛び立ってもすぐに近くの草葉の上にとまってくれます。セセリチョウの仲間は胴体にくらべて翅の大きさが小さいけれどジェット機のつばさのように尖った精悍な形の4枚羽をもち、草葉上にはその翅を4枚ともに斜めにもちあげた、とても格好のいいスタイルで止まります。翅にくらべて胴体が太いことは、翅の付け根の筋肉がとてもよく発達していることでもあり、セセリチョウの仲間は

例外なくチョウの中では最も速くとぶことができます。

写真記録のような姿勢をとってくれるとき、翅表の黄色部分が太陽光線のあたり具合で金色を帯びて輝くことがあり、とてもきれいです。翅の裏は和名のとおりまだら模様となっ



ていて、信州などにはヒメキマダラセセリなど翅表の模様がたいへんよく似たセセリチョウがいるけれど、キマダラセセリのような裏面模様のチョウは他にはいないので区別は容易です。6月頃にみる個体はその次の夏型にくらべて大型で見栄えがします。

キマダラセセリの学名は *Potanthus flavum* ですが、属名の *Potanthus* はギリシア語の複合語 Poto+anthos をラテン式に書き換えたもので”花を吸う”という意味であり、*flavum* はラテン語 *flavus* の中性形で”黄色の”という意味だそうです。

幼虫はエノコログサも食べるというからもっと身近に普通にみられてもいいと思われるチョウです。

